



Shibuya Culture Project

1996年のロンドンとピチカート・ファイヴ

原 知章

私は、1996年に久しぶりにロンドンを訪れた。私事になるが、私は中学2年生の頃(1984年度)に約1年間ロンドンに滞在していたことがあり――別のコラムで述べるつもりだが、そのときにスタイル・カウンシル、EBTG、シャーデーなどのアーティストと出会うことになった――ロンドンを訪れるのはその後初めてのことだった¹。面白いことに、1984年のロンドンの記憶は色々な場面が鮮明によみがえってくることがあるが、1996年のロンドンの記憶はかなり曖昧である。

ただひとつ、今でも鮮明に思い出すことがある。それはロンドンの(たしかオックスフォードストリートあたりの)素敵な雰囲気のアパレル・ショップに入ったときのことである。なんと、店内にピチカート・ファイヴの曲が流れていたのである。もちろん日本語の曲である(残念ながら、どの曲だったかは思い出せません)。

日本では、1993年頃から「渋谷系」という語がメディアに登場するようになり、その後数年のうちに広く普及し、いわゆる「渋谷系」のアーティストが一種のブームになった。これは個人的な印象にすぎないが、1996年頃は、そうした「渋谷系」ブームも、落ち着きを見せつつあったように思う(cf. 朝岡 2018; 加藤 2020)。そうした時期に訪れたロンドン

¹ 今思うと、大学生の頃にロンドンに行っておけばよかった……当時の私は――60～70年代カルチャーの遺産かもしれないが――「大学生になって自由な時間ができたから、インドに行くべきでしょ!」と友だちと盛り上がり、インド(ついでにタイ)に行ったり(インドの映画館で衝撃を受けたり、暑さに耐えきれず氷入りのさとうきびジュースを飲んで、大変な目にあったりした)、当時はまっていたアイスホッケーの本場であるカナダやアメリカに行ったりしていた(カナダでは、「自分は東京大好きです」というカナダ人男性と仲良くなり、一緒にバンクーバー観光をして、その後危うい目にあいそうになった)。大学生のみなさん、学生としてのかげがえのない時間を大切にしてください!

のアパレル・ショップで、当たり前のように——店員も客も驚いた様子など見せることもなく——ピチカート・ファイヴの曲が流れていたことに、店内でいちばん驚いていたのはたぶん私であった。

そのときの私はまだ、「渋谷系」の音楽が海外でどのように受容されつつあったのかということについて——「Shibuya-kei」という語が海外でも用いられつつあったことも含めて——ほぼ無知であった（cf. Reynolds 2011）。

つづく

参考文献

朝岡孝平, 2018, 「市場カテゴリーのダイナミクス——渋谷系音楽を事例として」一橋大学大学院商学研究科博士論文.

加藤賢, 2020, 「渋谷に召還される〈渋谷系〉——ポピュラー音楽におけるローカリティの構築と変容」『ポピュラー音楽研究』24: 17-34.

Reynolds, S., 2011, *Retromania: Pop Culture's Addiction to Its Own Past*, Faber & Faber.

※日本語文献を追記予定